

第33回地域医療現地研究会に参加して 豊の国おおいたで人口減少社会に立ち向かう 地域づくりを考える

— 仏の里とジオパークの島からオンリーワンの地域包括ケアを発信！ —

<大分県・国東市、姫島村>



国診協常務理事・歯科保健委員会委員長
長野県・佐久市立国保浅間総合病院医療技術部長兼歯科口腔外科部長
奥山秀樹（写真1）

はじめに

令和になり初めての国診協第33回地域医療現地研究会が令和元年5月17日（金）、18日（土）の2日間にわたり、大分県国東市と姫島村において開催された。今回のメインテーマは「豊の国おおいたで人口減少社会に立ち向かう地域づくりを考える」～仏の里とジオパークの島からオンリーワンの地域包括ケアを発信！～であった。豊の国大分で地域包括医療・ケアの実践を学ぼうと、地元大分県をはじめ、北は北海道から南は鹿児島県まで全国各地の国保直診・国保連合会から219名の皆さんに参加いただいた。

国東市は平成18年に国見町、国東町、武蔵町、安岐町が合併し誕生した市で、国東半島の東半分を占めている。人口2万8,000人の海と山に囲まれた歴史文化の香るまちである。古くから仏教文化が栄え、六郷満山ろくごうまんざんと呼ばれている神仏習合を特徴とした国東独自の文化がある。

姫島村は沿岸漁業と車えびの養殖を主な産業とする人口約2,000人の島で、近年「姫島ITアイランド構想」のもと、IT企業の誘致によるITの島づくりにも取り組んでいる。姫島は7つの火口跡が残っており、黒曜石などの岩石や珍しい地層があり、「おおいた姫島ジオパーク」に認定されている。また渡り蝶の「アサギマダラ」の休息地としても知られている。

今回の現地研究会は1日目の5月17日の9時半から



写真1 筆者

2日目の18日午前中までの開催であった。1日目は国東市のホテルベイグランド国東「アトレホール」で開講式が行われ、参加者は3グループ6台のバスに分乗し、国東市民病院と姫島村国民健康保険診療所、六郷満山ろくご総持院両子寺の3か所へ施設視察研修に向かった。1日目の18時半からはホテルベイグランド国東「アトレホール」で地域医療交流会が開催された。2日目は同じくホテルベイグランド国東「アトレホール」で9時半から全体討議が開催された。

研修1日目 - 5月17日(金)

前日に多くの参加者は大分県に入った。国東市には宿泊施設がそれほど多くなく、参加者の多くは別府市



写真2 開講式

に宿泊した。筆者も16日夕方に大分空港に到着し、空港バスで別府市のホテルに入った。

翌日の17日は大分県国保連合会に用意していただいたバスが別府市の各ホテルを廻り、開講式が開催されるホテルベイグランド国東に向かった。

【開講式】

9時半からホテルベイグランドホテル国東「アトレホール」で開講式が行われた（写真2）。はじめに国診協の押淵徹会長より開会挨拶があった。

「地域医療現地研究会は毎年全国の国診協会員が、地域包括医療・ケアに取り組んでいる施設に集まり、現地において気候風土に触れながら視察研修を行い、また、現地の方々との交流の中に地域包括ケアシステムの真髄を学ぶことを目的として開催されてきた。いまや日本の超高齢社会を支える社会的仕組みは自助・互助・共助・公助の助けあい・お互い様にその基礎を求めている。高齢化した地域を守備してきた国保直診が手探りで作り上げてきた地域を支える、地域包括医療・ケアはまさに地域住民の方々に自助の行動を促し、村社会が出来上がるとともに作り上げられてきた地域の絆“互助”の精神をもって豊かなコミュニケーションを作り上げ、さらには公的健康保険制度・公的介護保険制度“共助・公助”で強固に支え合う社会の仕組みを国保直診は作り上げてきた。

大分の地で生まれた地域包括医療・ケアは国診協が描く総合診療専門医を育成する土壌であると確信する。



写真3 開会挨拶を行う押淵国診協会長



写真4 開会挨拶を行う原国保中央会理事長

今回の地域医療現地研究会が、日本を“豊かな超高齢社会へと発展する一里塚”となるよう期待する」と述べた（写真3）。

次いで、国民健康保険中央会理事長の原勝則氏より挨拶があり、「国保中央会にとって、地域医療現地研修会は秋の地域医療学会、1月の地域包括医療・ケア研修会と並ぶ国診協との共催行事の一つになっている。国保中央会役員にとって普段は机上の議論しかしていない中で、現場を知る貴重な機会となっている。福井県・岡山県と参加し、大いに仕事に対するモチベーションを高めることができた。国保直診を取り巻く状況は大きく動いており、多くの課題に直面している。こうした厳しい状況の中で、国保直診施設の果たす役割を今一度確認し、課題解決に向けたヒントを地域医療の現場から得て、皆様方の日頃の業務に活かしていただく有意義な研究会となることを期待している」と述べた（写真4）。



写真5 来賓挨拶を行う三河国東市長



写真7 オリエンテーションを行う野邊国東市民病院事業管理者兼院長



写真6 来賓挨拶を行う広瀬大分県知事（代読の伊東大分県福祉保健部審議監）



写真8 国東市民病院

次いで歓迎の挨拶として大分県国東市長の三河明史氏より、国東市の紹介と「市の目標の一つである地元力充実（福祉・安全・子育て）において、国東市民病院が地域医療の中核として、住民や行政、福祉施設と連携した地域包括ケアシステムを確立するために今回の地域医療現地研究会の成果を期待している」と述べた（写真5）。次に来賓挨拶として、大分県広瀬勝貞知事の代理として大分県福祉保健部審議監の伊東氏より挨拶があった（写真6）。

最後に第33回地域医療現地研究会実行委員会会長で国東市民病院事業管理者兼院長の野邊靖基氏よりスライドを使い、大分県の国保直診施設の紹介と今回の現地研究会についてのオリエンテーションがあった（写真7）。約1時間の開講式終了後、参加者は3グループに分かれそれぞれ2台のバスに分乗し、施設視察に向かった。

【施設視察研修】

○国東市民病院（写真8）

まず、私たちAグループのバスは国東市民病院へ向かった。1階の地域ふれあいホールに参加者が集まり、看護部長の進行により、国東市民病院の紹介ビデオを見せていただいた。最初に野邊院長より病院の概要について説明があった。「仏の里ネットワーク講演会」や「子育て市民講座」「出前講座」など、病院内外での活動についてもお話があった。最後に「くにさき地域包括ケア推進会議（通称：ホットネット）について推進会議副会長のリハビリテーション科中村氏より説明があった。「地域住民が安心して暮らせるよう地域全体で支え合う体制づくり」を目的に、平成22年から市内で自主的に活動している団体で、国東市・姫島村で保健・医療・福祉・介護分野に従事している医師以外の多職種から構成されている会である（写真9）。



写真9 国東市民病院地域ふれあいホールでの説明



写真12 リハビリテーション科での説明



写真10 訪問看護ステーションくにさきでの説明



写真13 歯科口腔外科での説明



写真11 回復期リハビリテーション病棟での説明



写真14 地域医療連携室での説明

地域ふれあいホールでの説明の後、5グループに分かれ病院内を視察した。私たちのグループは、まず訪問看護ステーションくにさきを視察し、その後回復期リハビリテーション病棟、リハビリテーション科、歯科口腔外科、地域医療連携室を視察した。それぞれの部門でパネルを使用し詳細に説明をいただき、その場

で質疑応答も行われた(写真10~14)。

その後、地域ふれあいホールに戻ったが、そこには病院各部門のパネルが展示してあり、多くの参加者が見入っていた。昼食までの時間があり病院屋上へ行き、伊予灘の海や病院周辺の景色を楽しんだ(写真15)。地域ふれあいホールで昼食のお弁当をいただき、バス



写真15 国東市民病院の屋上で



写真18 姫島村営フェリー



写真16 六郷満山総持院両子寺仁王門



写真19 姫島村国保診療所



写真17 六郷満山総持院両子寺護摩堂（本堂）

で次の視察先に向かった。

○六郷満山総持院両子寺（写真16、17）

国東半島は神仏習合文化が栄えた地である。その国東半島のほぼ中央にあり、最も標高の高い位置にある両子寺をガイドの方に案内していただき見学した。両

子寺は718年に開基した六郷満山の中では中山本寺で、江戸期より六郷満山の総持院として全山を統括してきた。石像の仁王門、護摩堂、石の階段を上り奥の院、最後に講堂を見学した。その後バスで山を降り伊美港に向かった。

○姫島村

伊美港からチャーターしたフェリーでバスとともに20分の船旅で姫島に渡った（写真18）。姫島港からバスに乗り、島唯一の信号機を通り姫島村国民健康保険診療所（写真19）へ向かった。診療所に隣接した姫島村高齢者生活福祉センターの講堂で、三浦源太所長から説明を受けた（写真20）。

診療科は内科、外科、小児科、眼科、歯科で、病床数は16床。医師3人、歯科医師1人、看護師14人、理学療法士2人等の体制で日々の診療を行っている。村の医療費や介護認定率は低く、一方平均寿命や健康寿



写真20 三浦源太所長からの説明を受ける



写真22 アサギマダラ（蝶）



写真21 姫島灯台



写真23 地域医療交流会で藤本姫島村長の挨拶

命は大分県でもトップクラスであるとのことであった。問題点として少子高齢化による人口減、看護師不足がある。診療所は診療中のため施設内を見学することはできなかった。

その後、バスで姫島内を見学した。姫島ジオパーク推進協議会職員の方にガイドをしていただいた。姫島は7つの火山からできている島で、そのうち4つがトンボロという砂洲でつながっている。島の代表的な産業である車えび養殖場を車窓から見学し、東端の姫島灯台に行き見学した（写真21）。そこではアサギマダラをちょうど見ることができた（写真22）。その後、南海岸沿いのひめしまブルーラインを通り、海や大海の褶曲構造を車窓から見ながらフェリー乗り場に戻ってきた。姫島港から再びフェリーで伊美港に戻り、バ

スでホテルベイグランドホテル国東に向かった。

[地域医療交流会]

現地研究会1日目の夜は恒例の交流会が開催され、204名が参加した。はじめに姫島村藤本昭夫村長（大分県国民健康保険団体連合会副理事長）から歓迎のことばと開会の挨拶があった（写真23）。次いで、今回の地域医療現地研究会実行委員会会長の国東市民病院事業管理者の野邊靖基院長より歓迎の挨拶があった（写真24）。その後、今回の地域医療現地研究会に参加いただいた厚生労働省保険局国民健康保険課長の野村知司氏より来賓挨拶をいただいた（写真25）。次いで国東市の三河明史市長より乾杯の挨拶があり（写真26）、地域医療交流会が始まった。

大分の美味しい料理や姫島の車えびに舌鼓を打ちながら、地域医療などについて参加者同士語り合った



写真24 地域医療交流会で野邊国東市民病院長の挨拶



写真27 地域医療交流会



写真25 地域医療交流会で野村厚労省国保課長の挨拶



写真28 交流会のアトラクション「六郷鬼龍太鼓」

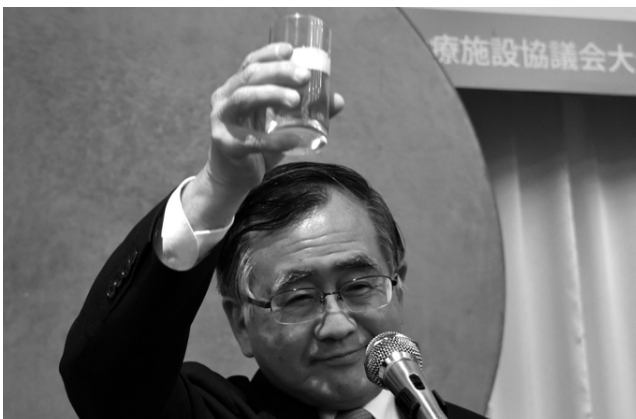


写真26 交流会で乾杯の挨拶を行う三河国東市長



写真29 閉会挨拶を行う小野杵築市立山香病院事業管理者

(写真27)。またアトラクションとして、国東の六郷鬼龍太鼓という迫力のあるパフォーマンスを披露していただいた、鬼が神々で大蛇が邪悪なるもを表現することのであった。(写真28)。

最後に全国国民健康保険診療施設協議会大分県支部理事で杵築市立山香病院事業管理者の小野隆司院長よ

り閉会の挨拶があった。小野院長は6年前に奄美大島から大分県に来たとのことで、今回のテーマの「人口減少に立ち向かう」のではなく「人口減少を受け入れる」という言葉が印象的であった(写真29)。参加者はそれぞれの宿泊先に帰って行き、それぞれ二次会に参加したようだ。



写真30 全体討議



写真32 全体討議での佐藤佐伯市国保丹賀・大島診療所長



写真31 全体討議座長の木村豊後大野市病院事業管理者



写真33 全体討議での小川国東市高齢者支援課長兼地域包括支援センター所長

研修2日目 - 5月19日(土)

[全体討議]

2日目はホテルバイクランド国東「アトレホール」で9時半より「豊の国おおいただで人口減少社会に立ち向かう地域づくりを考える」というテーマで全体討議が行われた(写真30)。

全体討議の座長は、全国国民健康保険診療施設協議会大分県支部支部長代行の豊後大野市病院事業管理者である木下忠彦院長が務め(写真31)、佐伯市国民健康保険丹賀・大島診療所の佐藤裕隆所長(写真32)、国東市高齢者支援課長兼国東市地域包括支援センターの小川浩美所長(写真33)、新共栄鉱業株式会社の河野高洋代表取締役常務(写真34)の3名から報告があった。



写真34 全体討議での河野新共栄鉱業株式会社代表取締役常務

佐藤裕隆所長からは大分県南部で宮崎県と接する佐伯市の現状について、高齢化とともに人口減少にある状況を説明いただいた。その中で8か所ある国保診療所の診療件数も減少しているとのことであった。佐藤

所長が勤務する丹賀診療所は、月木の午前と水金の終日診療、そして大島診療所には火曜日に診療している。その他の国保診療所も週半日から4.5日の診療体制となっている。受診者の減少に伴い経営悪化や施設・医療機器の老朽化が問題となっている。

佐伯市としては診療所の統廃合、コミュニティバスによる交通手段の確保、訪問診療や巡回診療を検討している。こうした厳しい現状の中、人口減少への取り組みとして「めざせ！健康長寿日本一おおいた」を目標に、減塩マイナス3g・野菜350g・歩数プラス1,500歩に取り組んでいるとのことであった。

小川浩美国東市高齢者支援課長兼地域包括支援センター所長からは、まず「週一元気アップ教室」のビデオとNHKで放送された国東市の取り組みのビデオを拝見した。ゴミ出しや買い物などを地域で支え合う様子が紹介されていた。国東市も人口減少であり高齢者も減少しているが、医療介護の必要度が高まる85歳以上人口は増加している。共助・公助に互助・自助を総動員し地域包括ケアシステムを構築知る必要がある。そうした中、要介護認定率が低下していることを報告された。

二次予防事業に重点をおき、地域ケア会議では個々の自立支援型（課題解決型）介護を積み上げながら地域課題を解決する事業を展開している。そのひとつとして「健口・栄養ステーション」の設置を行った。さらに社会参加を担保する地域づくりを行っている。そのひとつとして「週一元気アップ教室」がある。また「互助」の力を活用した支え合う地域づくりを推進するため、地域支え合い推進員（生活支援コーディネーター）を配置し、有償ボランティアとして、高齢者が日常生活で感じる困りごとに対し支援を行っている。以上のような内容のお話をしていただいた。

新共栄鉱業株式会社の河野高洋代表取締役常務からは、まず新共栄鉱業は石灰石その他の鉱物及び土石の採掘請負をしている会社で、従業員は6名とのことであった。「地域からお借りした大切な人という資源を、地元にお返しする時が来ても、まだまだ元気で活躍いただきたい。そのために可能な限り健康を維持でき、



写真35 全体討議で野村厚労省保険局国保課長より助言

地域で活躍できる人をお返ししたい」との健康経営の考えのもと「健康リテラシーの高い社員」の育成に取り組んでいる。

具体的な取り組みとして「健康診断結果を見て、健康目標・生活習慣の改善を考える社員に」、毎週の週礼時に健康情報を提供し、体重計・血圧計を社内に常備し毎日健康状態を把握し成果を確認できるようにしている。さらに昼休みに担当者が声掛けし、ウォーキングやゴルフ打放などの軽運動を行っている。また、花見や紅葉狩りを兼ねた社内ウォーキングイベントを実施したり、津久見市主催の「つくみんイキイキ健康マイレージ」に社員の家族とともに参加したりしている。

こうした取り組みによって、間食をしなくなった、野菜多めの食事変わった、社内・地域でのコミュニケーションが増えイキイキとした職場になった。また平成29年度健康経営知事顕彰を受賞した。今後も身の丈にあった活動の継続をめざし、さらに禁煙の取り組みも行っていきたいとのことであった。

その後、会場から質疑応答があり、佐伯市の国保診療所で医師が各診療所を巡回する体制についての質問があった。また意見として医療過疎地域で生きることの意味や若い人が地域で就労できる環境作り（儲かる1次産業）などの意見が上がった。

3名の発表の後、厚生労働省保険局国民健康保険課の野村知司課長より助言があった（写真35）。まず、佐伯市の取り組みでは、人口減少のなか医師が効率よ



写真36 小野国診協副会長より助言

く診療できる体制作りが必要であること、医師と住民のつながりのなかで訪問診療や巡回診療も一つの方法であるとお話された。

次に国東市の取り組みについては、地域包括ケアシステムの大分県モデルとしての地域作りという点で評価いただいた。要介護者や障がい者にとって住みよい地域は誰にでも住みよいので、医療介護福祉のみならず、日常生活支援の大切さをお話された。新共栄鉱業株式会社についても大変素晴らしい取り組みとお話され、予防の段階からの取り組みを評価いただいた。

最後に国診協副会長で秋田県市立大森病院の小野剛院長より助言があった(写真36)。人口減少社会のなかで医療介護を継続することは重要な課題であり、より良いシステム作りを国に提案してきたい。また健康経営という考え方は企業だけでなく、地域でも元気で心豊かな高齢者を増やす取り組みが必要と述べた。豊の国おおいで今回の地域医療現地研究会ができたことに感謝して助言の言葉とした。

【閉講式】

11時より閉講式が行われた。まず次期開催地の福島県国保医学部会顧問の堀川哲男・公立藤田総合病院名誉院長より挨拶があった。テーマは「桃源郷ふくしまで実践する地域包括医療の新たな連携—震災・復興・絆、そして未来へ—」であり、2020年5月15、16日にホテル福島グリーンパレスで開催すること



写真37 次期開催地の紹介を行う堀川福島県公立藤田総合病院名誉院長



写真38 閉会の挨拶を行う押淵国診協会長

との報告があった。施設視察研修先は公立藤田総合病院と介護老人保健施設桑折「聖・オリーブの郷」、特別養護老人ホーム「国見の里」の3施設であるとの紹介があった。参加者はまた来年、福島で開催される現地研究会を今から楽しみにすることができたプレゼンテーションであった(写真37)。

最後に国診協会長の押淵徹長崎県国保平戸市民病院院長より、開催地への謝辞と全体のまとめとして閉会の挨拶があり(写真38)、また10月4、5日に開催される長崎県・佐賀県共同開催の全国国保地域医療学会についての報告があり、第33回現地研究会の2日間にわたる全日程が終了した。参加者は大分空港や別府方面へ向かうバスに分乗し、帰路に立った。大分県国保連合会の皆様に見送っていただき、2日間の現地研究会が本当に心温まるものになった。